

富村の合併と住民生活への影響

野邊 政雄

岡山県富村は2005年の町村合併の結果、鏡野町の一部となった。本稿では、町村合併の結果、鏡野町富地域内にある組織はどのように変更され、住民生活はどのように変化したのかをまとめた。さらに、高齢者やリーダーは富村の町村合併をどのように評価しているかを紹介した。

Keywords : 富村, 町村合併, 社会福祉協議会, 農業協同組合

1 本稿の目的

岡山県富村は2005年の町村合併の結果、鏡野町の一部となった。(本稿では、旧富村を「富地域」と呼ぶ。)本稿では、町村合併の結果、鏡野町富地域内にある組織はどのように変更され、住民生活はどのように変化したのかをまとめておきたい。さらに、高齢者やリーダーは富村の町村合併をどのように評価しているかを紹介する。

2 町村合併による組織上の変化

町村合併によって、地方自治体である富村が鏡野町の一部となっただけではない。町村合併に伴って、富地域にあるその他の組織にも変化があった。次のような組織上の変化が、富地域で見られた。

第1に、富地域に配置される役場の職員の減少がある。町村合併後、かつての富村役場は鏡野町役場富振興センターとなった。そして、鏡野町役場はパソコンなどの情報機器を使って事務を省力化し、事務を鏡野町役場で集中管理するようになった。そのために、富村役場に勤務していた多くの職員は鏡野町役場に移動となり、富振興センターに配置される職員の人数が少なくなった。町村合併前には約24人が富村役場に勤務していたが、町村合併後には7人だけが富振興センターに勤務している¹⁾。これは保健婦についてもいえる。町村合併以前には富村役場に3人の保健婦がいたが、現在は富振興センターに1人の保健婦がいるだけとなった。他の保健婦は鏡野町役場の本部に配置され、本部の指示で働いている。

学校の統合も日程にのぼっている。富中学校の生徒は年々減少し、2005年には19人しかいなくなった。これに対し、教員は11人もいる。つまり、校長1人、教員6人、養護教諭1人、非常勤講師3人である。このように、生徒1人あたりの教育費がとても高額になるので、富中学校は2010年に鏡野町の他の中学校と統合されるという話が出ている。統合されると、富地域の中学生はスクールバスで鏡野町の別の中学校へ通学することになる。

第2に、地方自治体以外の団体の合併も起こった。町村合併に伴って、振興公社、社会福祉協議会、森林組合といった地方自治体以外の団体も組織の改編や合併がなされた。また、町村合併の前に、農業協同組合の合併がなされた。

富村役場は1987年に(財)富村振興公社を設立した。振興公社は農産物の加工と販売、あまごの養殖と販売、宿泊施設、キャンプ場、温泉の経営、道路の除雪作業、ゴミ処理をおこなっていた。これらの事業を実施することによって、富村役場は富地域内で就業機会を創出していた。ところで、富地域には特段に観光客を引きつけるような観光資源があるわけではないから、宿泊施設、キャンプ場、温泉の利用者も多くはない。とくに、宿泊施設「登美山荘」の宿泊客は少なかった。だから、振興公社は収益をあげることができなかった。そして、富村役場は地方交付税などを使って、振興公社が生む赤字を補填してきた。

町村合併に伴って、(財)富村振興公社は名称を

(財) 富ふるさと振興公社と変更した。そして、鏡野町役場は振興公社の生む赤字をすべて補填するわけではなくなり、経営の効率化を求めようになった。経営の効率化を更にはかるために、2008年4月から、第3セクターの(株)未来奥津が振興公社の業務の大半を引き継いで、事業を実施している。(株)未来奥津は、鏡野町役場、農業協同組合、森林組合が出資して設立された会社である。富地域だけでなく、隣接する奥津地域(旧、奥津町)でも事業を営んでいる。その会社は宿泊施設「登美山荘」の経営をやめて、農産物の加工と販売、あまごの養殖と販売、キャンプ場と温泉の経営、除雪作業をおこなうようになった。ゴミ処理は入札の結果、NPO法人がおこなうことになった。(財)富ふるさと振興公社が(株)未来奥津になっても、富地域で働く職員の人数は変わっていない。9人が(株)未来奥津の正規職員ないし常勤アルバイトとして富地域で働いている。

町村合併に合わせて、社会福祉協議会と森林組合の合併もなされた。町村合併以前には富村に富村社会福祉協議会があったが、町村合併後に鏡野町社会福祉協議会に統合された。町村合併以前には、富村に富村森林組合があった。この森林組合は近隣の森林組合と合併し、2005年に作州鏡野森林組合となった。

富村農業協同組合は1995年に合併し、とまた農業協同組合富支店となった。さらに、2001年に、津山市農業協同組合、とまた農業協同組合、久米郡農業協同組合が合併し、津山農業協同組合となった。そして、富支店は、津山農業協同組合の富営業所となった。富村農業協同組合の時代には8人ほどが働いていたが、現在、津山農業協同組合の富営業所には3人が勤務しているだけである。

3 住民生活への影響

町村合併は、地方自治体の合併にとどまらず、富地域にあるその他の組織の変更ももたらした。そうした組織上の変化は、富地域に居住する一般の住民の生活に影響を及ぼした。住民への聞き取り調査にもとづいて住民生活への影響をまとめると、次のようになる。

第1に、さまざまな行政サービスの削減である。町村合併後は、鏡野町全体の行政サービスのレベルを同一にすることになるので、富地域で鏡野町の他の地域よりもレベルの高かった行政サービスが削減された。さらに、町村合併そもその目的が行政の効率化であったことから、過剰と考えられる行政サービスが削減された。

行政サービスの削減に関して、富地域の住民は多くの事例をあげた。①町村合併前、富村役場はCATVで村のお知らせを流していたが、町村合併後にそれが廃止された。②町村合併前、雪が降ったとき、富村役場は除雪車できめ細かく道路の雪かきをしていたが、町村合併後、鏡野町役場は主要な道路しか雪かきをしなくなった。③町村合併前はインターネットの接続料は無料であったが、町村合併後は有料となった。④町村合併前、富村役場は補助金を民間バス会社に支出して勝山駅と富村との間にバスを運行させていたが、町村合併後の2007年にそのバスの便が廃止された。その結果、富地域とその外とを結ぶ公共交通機関は、鏡野町役場が運行する、早朝に富地域の富振興センターの前を出発して津山駅まで行き、夕方に津山駅を出発して富振興センターに戻るバスだけとなってしまった。⑤町村合併後、国民健康保険料が高くなった。⑥富村役場は高齢者に年金の他に村独自で手当を支給していたが、町村合併後、その手当の額が少なくなった。⑦富地域では住民に参加してもらい、道路の清掃(道路の草刈り、側溝の石拾い)をしている。町村合併前、富村役場は道路の清掃に参加した人に毎回2000円を支給していた。町村合併後も住民に参加してもらい、道路の清掃をしているが、1年に1回参加者に500円を支給するだけとなった。⑧住民が参加して、河川の清掃を1年に1回実施している。町村合併前、富村役場は参加者に傷害保険をかけていたが、町村合併後、鏡野町役場は参加者の傷害保険の掛け金を負担しなくなった。

第2に、事業実施の柔軟性が失われたことである。町村合併前、富村役場が決定し、独自に事業を実施できた。ところが、町村合併後には、ある事業を富地域で実施しようとしても、富振興センターにはその決定の権限がないので、富振興センターの職員は鏡野町役場にいちいち事業実施の許可をもらわなければならなくなった。富振興センターが住民からの要望の大きい事業を鏡野町役場に提案しても、その事業が富地域を特別に優遇するような場合には、鏡野町役場は事業の実施を認めないこともありうる。また、鏡野町役場にまで事業実施の許可を取らなければならぬので、事業の決定にも時間がかかるようになった。このように、こまわりのきく行政ができにくくなっている。

第3に、富地域の住民の民意が鏡野町の町政に反映されにくくなるおそれが出てきたことである。富地域の人口は少なく、鏡野町議会議員選挙の有権者数は少ない。町村合併の特例で現在は鏡野町議会に議員を3人出している。しかし、2010年の町議会

議員選挙のときには、この特例はなくなる。有権者が富地域に少ないので、次回の選挙のときに富地域から鏡野町議会に1人の議員さえも選出できなくなってしまうかもしれない。

地理的に見ると、富地域を流れる川は旭川水系であるのに対し、富地域以外を流れる川は吉井川水系である。このように、富地域は地理的に鏡野町の中で主要な地域から外れているから、富地域の利害が鏡野町の町政の中で軽視されるおそれもある。こうしたことから、町村合併によって、富地域の民意が鏡野町の町政に反映されなくなってしまうかもしれない。

第4に、行政サービス以外のサービスの低下がある。富村農業協同組合の時代には、顧客は通帳を使って窓口で金銭の出し入れができた。農業協同組合が合併してからは、顧客は通帳を使って窓口で金銭の出し入れをすることはできなくなった。もし顧客が通帳を持参して金銭の引き出しに富営業所へ来たときには、職員が顧客から通帳を預かって、それを本店に持って行って金銭を引き出し、富営業所で通帳と金銭を顧客に渡す。このように、手続きが面倒になり、顧客はその場で窓口において金銭を受け取れなくなってしまった。富村農業協同組合が合併した後でも、顧客は津山農業協同組合の富営業所でキャッシュカードを使って機械で金銭の金の出し入れは引き続きできる。しかし、高齢者はキャッシュカードを使って機械で金銭の出し入れをするよりも通帳を使って窓口で金銭の出し入れをすること好むから、多く的高齢者は口座を農業協同組合から郵便局に移した。また、合併後、富営業所は手形を取り扱わなくなった。

第5に、組織の範囲が広がったので、親密なサービスが受けられなくなったという意見もあった。町村合併以前には富村の社会福祉協議会が富地域内の世話を受けた人に介護ヘルパーを派遣していた。だから、世話を受ける人は介護ヘルパーと顔なじみであった。町村合併後、旧富村の社会福祉協議会は鏡野町社会福祉協議会となった。鏡野町は広大なので、鏡野町社会福祉協議会の本所である鏡野地域福祉センターでなく、支所の奥津地域福祉センターが富地域、奥津地域（旧、奥津町）、上斎原地域（旧、上斎原村）へ介護ヘルパーを派遣している。そのために、顔を知らない介護ヘルパーが派遣されてくることも起こっている。

4 住民による町村合併の評価

筆者は「富地域高齢女性調査」を実施するために、富地域に住む40人ほどの高齢者や数人のリーダー

と会って、話をした。多くの人々は自分から町村合併について語らなかったけれど、数人の高齢者やリーダーが町村合併の評価を語っていた。彼らが町村合併をどのように捉えていたかを紹介しておきたい。

先述したように、富村役場が独自に高齢者へ支給していた手当は、町村合併後にその額が減らされた。また、町村合併後、富振興センターには1人の保健婦しかいなくなったことは、前述の通りである。これらのことから、富地域のリーダーの1人である高齢男性は、「富村は福祉の村でしたが、今ではそうではなくなっています。年寄りにとっては、（町村合併で）不便になっています」と言っていた。さらに、この男性は、「富（富地域）では年寄りが多くなりました。でも、その人たちを支えるように行政はしてくれません。合併はよくありませんでした。合併によって、村の活気がなくなりました。村の力がなくなりました」とも話していた²⁾。このように、町村合併による行政による福祉サービスの低下を批判していた。

町村合併を評価する高齢者やリーダーはまったくいなかった。しかし、あるリーダーは中学校の統合には賛成していた。これは、次のようなことからである。富小学校の生徒は岡山市の小学校の生徒と富地域で交流をした。岡山市の小学校の生徒は川に飛び込んだりして、積極的に遊んでいた。これに対し、富地域の小学校の生徒は、自分たちだけでまともなだけで、消極的であった。また、富小学校では、できる子供の学力をもっと伸ばそうとせず、他の子供たちが追いついてくるのを待っている。このリーダーによれば、富地域の子供たちには積極性や競争心が欠けているという。中学校の統合によって、富地域の中学生がもっと規模の大きい中学校で学ぶことで、切磋琢磨が富地域の中学生の間に生まれ、積極性や競争心が育つ。そのリーダーはこの点で中学校の統合を評価している³⁾。

(注)

- 1) 町村合併前の富村役場の職員数は38人であったが、この人数には保育園の保母なども含まれている。
- 2) 2008年3月29日にMさんに実施した聞き取り調査による。
- 3) 2006年4月28日にKさんに実施した聞き取り調査による。